他 山 の 石 (11)

磐 瀬 太 郎

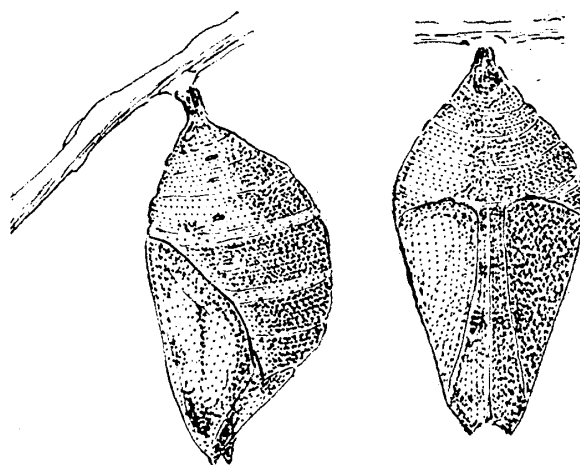
Lessons From Here and There (11) By TARO IWASE

(11) **Morpho 属の幼虫と蛹**, メキシコから南ブラジル，北アルゼンチンにかけて産するモルホは，華麗蝶として，東洋熱帯のトリバネチョウと，その美しさを競うものである. A. H. CLARK は，フクロウチョウを1つの科 Brassolidae に独立させ，モルホと東洋のワモンチョウを合せて Morphidae モルホチョウ科としているが，私の考えでは，ワモンチョウもフクロウチョウも，幼虫の形や食草等から見てジャノメチョウ科に近く，モルホは少し類縁が遠く，どちらかと云うとジャノメチョウ科よりタテハチョウ科に近いのではないかと思っている.

モルホの幼虫の食草を調べて見ると，今までに文献に現われた限りでは，単子葉のものは1つもなく，双子葉のものばかりである.

Morpho *achillaena* マメ科 Platymiscum
〃 *catenarius* マメ科 Scutia, Inga
〃 *anaxibia* テンニンカ科 "Grumexana"
〃 〃 ウィンテラナ科(?) Canella
〃 *hercules* ツヅラフジ科 "Cipó"

これに反し *Caligo* (バナナ，サトウキビ)，*Amathusia* (バナナ)，*Taenaris* (ホモノ科)，*Faunis* (サンキライ，タコノキ)，*Discophora* (ココヤシ，タケ) と云った様に，フクロウチョウ，ワモンチョウ類の食草は，皆単子葉である.

幼虫の最大の特長は，亜背に沿って剛毛の束があることで，これは体節によって長短があり，第3節，第4節のものは特に長い様である. 色彩はおしなべて派手で，黒，赤，白，褐色等を混え，これは剛毛についても，背線部の斑紋についても云えることである. 以上の点は，いさゝかワモンチョウの幼虫に似ている. 頭部は比較的大きく細毛が多く，プードル犬の様である. 頭頂には1対の角があるが短かい. 尾端もまた二又しているが，余り著しくはない. 最大の特長はのどにあたる辺り (胸部第1節) に，分泌腺が開口していることで，この点はフクロウチョウ幼虫と軌を一にしている (本誌2巻4号，他山の石第3回，1951参照). 卵がまとめて産みつけられるせいか，幼虫は終令まで群生している. 6令まであるらしいが，令が進むと夜間摂食性となり，昼間は親木 (食草がつる性の場合) の枝にかくれている. 共同して巣をつくる習性があるので，梢の葉を綴っているところを遠くから眺めると，花が咲いている様に見えるとも云う. 卵は比較的大きく (*argentinus* では直径 1.75mm)，半球型で平滑なところは，ジャノメチョウ科に近い. 幼虫は *argentinus* では 55mm にも達する.

Morpho Larva 及び Pupa

蛹は側面から見るとオオムラサキの蛹に似ているが，腹面から見ると幅が広くジャノメチョウ科の輪廓を思わせる. 蛹の色は緑色系統で，*argentinus* では 25.5mm に達する. 蛹期は2ケ月との記録もある.

成虫期は南半球の2月3月で，北半球で云えば8月9月にあたる. 越冬態，発生回数等ははっきりしないが，卵か幼令幼虫で冬を越し，年1回の発生であろうか.

図は幼虫も蛹も色々の記録から最大公約数的にまとめて見たが，成虫の外観から見ただけでもいくつかのグループにわけられそうであるから，いさゝか無理な

気もする．いずれ詳しい資料を得て再び筆をとって見たい．モルホに限らず南米の蝶の生活史に関するまとまった文献があったら，御教示を頂きたい．終りに，何時もながら色々と御教示頂いた江崎先生に御礼申上げる．(17/IX 1954)

ダイミヨウセセリの異常型について

西村公夫

On the aberrant form of *Daimio tethys felderi*

by KIMIO NISHIMURA

本種の異常型に就いては永見氏（永見一男他，鳥取県産蝶類に就いて，p. 12, 1934）がダイセンダイミヨウセセリとして記録したものが最初のようで，最近それと同じ型の標本を得たので，今までの記録とともにまとめてみた．

Fig. 1：正常型； Fig. 2：A♀；
Fig. 3：B♀； Fig. 4：C♂.

本異常型は写真に示す様に前翅の白紋の全部或は一部を消失するもので，その他の点に就いては何等変異は認められない．既にこの型のものは8匹を数えるが，何れも同系統のものと思われ，しかもその産地は鳥取，松江（成瀬悟朗氏の私信（1954）により平田信夫氏が採集された由），京都（金田毅，あげは（ガリ版）1954及同氏私信；秋山茂，新昆虫 VIII の6，p. 54, 1955）と山陰地方にかたよっている様である．私は或は form か variation かと疑ってみたがその斑紋の異常程度が一致しないので単なる個体変異として扱うに止めておく．

なお白水隆氏の私信（1953）によると本異常型は全く他の地方で発見されておらず，未記録の由である．従ってこれは地域の特異性か或は気候に関係するものかは不明であるが，今後も山陰地方各地で採集出来るものと思う．

資料の提供をうけた永見，金田，秋山，白水，中井，成瀬の諸氏に謝意を表する．

個体番号	産地	採集年月日	採集者	備考
A♀	鳥取県西伯郡大山村槙ケ原	27. V. 1933	永見一男	中室白紋1ケのみ残存
B♀	鳥取市東町久松山	27. V. 1931	塩村 功	殆んど全部消失
C♂	鳥取市上町樗谿	5. VIII. 1941	香川三郎	中室白紋1ケのみ残存
D♂	島根半島三坂山	27. V. 1953	中井 衛	半分消失
E♀	島根半島三坂山	14. VI. 1953	中井 衛	一部消失
F?	松江	?	平田信夫	詳細不明
G♂	京都府綾部市四尾山	16. VII. 1953	秋山 茂	全部消失，白脈残す
H♀	京都府綾部市吉美	21. VII. 1954	秋山 茂	不明